



ジャガイモ

山武経済センター
営農指導員 小関 和彦

農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural - work technical diary



秋冬ネギ

やさいの里営農センター
営農指導員 中村 克己



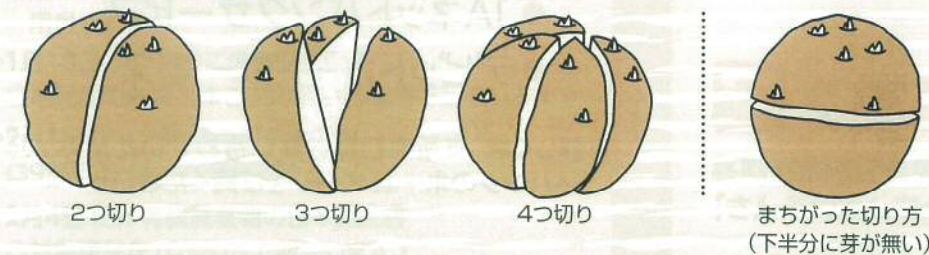
植え付け準備
種イモが届いたら、できるだけ速やかに開封して、傷み、変色、腐敗したイモは取り出し、コンテナに入れて風通しのよい場所に保管してください。
管理中の適温は、4〜5℃とされており、口中は温度が25℃以上にならないようにし、夜間は凍結しないように注意してください。
催芽は浴光催芽を行い、欠株や生育のバラつきを防止しましょう。浴光催芽は品種により異なりますが、20日ぐらゐを目安とってください。
昨年10月に日本農業新聞に掲載された片倉コープアグリ(株)の「ソイルサプリエキス」を種イモにコーティング処理すると、特定の有用微生物がイモの表面で増殖し、健全な生育に貢献すると報告されました。使用方法は、催芽が完了した種イモを「ソイルサプリエキス」の5倍希釈液(ソイルサプリエキス20gに水80gを加える)に漬けて、まんべんなくコーティングした後、雨や直射日光が当たらない風通しの良い場所ので風乾してください(処理後の「ソイルサプリエキス」は、液肥として使用できます)。
種イモは、一片の重さが40g前後で2〜3個の芽がつくように切断し、2



植え付け準備

日程度、陰干ししましょう(図①)。また、黒あざ病予防のため、種イモはバリダシン粉剤DLを種イモ重量の0.3%粉衣処理しましょう。
圃場の準備および植え付け
土壌pHが高いところ(6.5以上)では、そうか病の発生が多くなるので、作付けを控えるか、石灰質肥料を控えましょう。施肥例は表③を参考にしてください。「畑のカルシウム」は、品質向上、増収効果を目的とした土壌改良資材で、pHの高い圃場でもpHを変化させずにカルシウムを補給できるので、おすすめ。の石灰資材です(10a当たり100kgが目安)。
植え付け前には、ネキリム

図① 種イモの切り方



11月の分析経過について

合計15点	
多成分一斉分析	秋冬ニンジン 7点
残留農薬分析点数	ニンジン(ちばエコ) 3点
	ニラ 1点
	越冬キュウリ 2点
	里芋 1点(インショップ)
	ネギ 1点(インショップ)

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 合計18点

シ類の防除として、ダイアジノン粒剤5を10a当たり6kg施用します。植え付けは畝幅90cm、株間25〜30cm、深さ10cm前後とし、覆土のかけすぎに注意してください。雑草の発生が多い圃場は、植え付け後にゴーソーサン乳剤を散布しま

表③ ジャガイモの施肥量の目安

肥料名	成分	施肥量(10a当たり)
マルチサポート2号	微量元素	60kg
苦土重焼燐	0-35-0	40kg
さんぶジシアン有機特806	8-10-6	200kg

平成29年産の状況について
昨年10月の台風の影響により、各地で圃場の冠水や倒伏の被害が発生し、多くの方は手直しでの作業に追われ、収穫が半月〜1カ月遅れてのスタートとなりました。その結果、年内の出荷量は前年の2割減となり、年明けの1月以降に出荷が集中する恐れがあります。
一方で、年内から葉枯病(黄色斑紋病)や黒腐菌核病の発生も見られることから、収穫作業優先で防除が後手にならないよう注意が必要です。
葉枯病
糸状菌(カビ)によって引き起こる病害で、春先や秋(15〜20℃)に発生し、降雨によって拡大します。主に外葉では、紡錘形〜楕円形の病斑を形成し、暗褐色ですす状のカビを生じます。中心葉付近では、黄緑色の不規則な斑紋症状(黄色斑紋病)を生じ、商品価値を著しく低下させます(写真①参照)。葉枯病は、べと病の病斑に二次的感染する場合も多く、早めの予防散布が重要となります(表①参照)。また、肥切れや草勢の衰えた圃場での発生が多いため、肥培管理や適期収穫に努めるようにしてください。
黒腐菌核病
JA山武郡市管内でも沿岸部を中心



黒腐菌核病

に近年被害が拡大している重要病害です(写真②、表②参照)。主に晩秋から春先にかけて(気温10〜15℃の寒い時期)に発病します。初めは葉先が黄白色になり、次第に葉全体が黄白色に枯れ、株が萎凋(しおれ)します。そのため、生育が停止し、最終的には枯死します。被害株を引き抜くと、根が腐敗しているため簡単に引き抜けてしま、最終的には全く無くなってしまう。特に年明け以降、病害の進行が早まるため、各圃場で発生の有無を確認し、以下を参考に対策を行ってください。
①連作を避ける
圃場ローテーションが可能な場合は連作を避け、緑肥や他の作物を導入します(何も作付しないと、菌密度は低下しない)。
②土壌消毒を行う
薬剤の効果を発揮するためには、処理時の土壌水分の確保、被覆処理は必須です。
③定植後の薬剤体系処理
定植後の防除として、モンガリット粒剤とアフエットフロアブルの体系処理が効果的とされています。なお、黒腐菌核病の対策は発病状況により異なるため、前年の発生状況を確認しておくことも重要です。

表① 葉枯病・黒斑病・べと病に登録のある薬剤

葉枯病	黒斑病	べと病	薬剤名	希釈倍率	収穫前日数	使用回数
●	●	●	アミスター 20フロアブル	2000倍	3日前まで	4回
●		●	プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	14日前まで	3回
●	●		ベルコート水和剤	2000倍	30日前まで	3回
●	●		ポリベリン水和剤	1500倍	14日前まで	
●		●	テーク水和剤	600倍	14日前まで	3回

写真① 黄色斑紋病斑



表② 黒腐菌核病に登録のある薬剤

薬剤名	使用量(10a当たり)	使用時期	使用回数	備考
ディ・トラパックス油剤	30〜40ℓ	播種または植付けの14日前まで	1回	土壌消毒
バスアミド微粒剤	20〜30kg	播種または定植14日前まで	1回	土壌消毒
モンガリット粒剤	6kg	生育期 ただし、収穫14日前まで	3回	株元散布
アフエットフロアブル	1000〜2000倍	生育期 ただし、収穫14日前まで	2回	株元灌注1ℓ/m ²

写真② 黒腐菌核病

